

社会主義・共産主義的世界観の 特質と問題点

剰余価値学説と唯物史観の
批判的検討(2)

筒井正夫

Masao Tsutsui

滋賀大学 経済学部 / 教授

目次

はじめに

I 剰余価値学説とその問題点

1 概説

2 問題点 ……以上前号

II 唯物史観とその問題点

1 概説

2 問題点

(1) 下部構造の上部構造規定論について

……以上本号

(2) 社会構成体の歴史的移行論について

……以下次号

(3) 経済的社会構成の継起的発展段階論につ
いて

おわりに

II 唯物史観とその問題点

ここでは剰余価値学説とともに社会主義・共産主義的世界観の根幹をなす今一つの柱である唯物史観について、その概要をまず示し、その上で問題点を検討しよう。

1 概説

マルクスが唯物史観の概要を公式化して示した『経済学批判』(武田隆夫他訳、岩波文庫)の序文の文章を掲げよう。本文は区切りの無い一続きの文章であるが、内容をわかりやすく示すために、三つの段落に区切り、それぞれ1) 2) 3) と記号を付して書き表した。

わたくしにとってあきらかになり、そしてひとたびこれをえてからはわたくしの研究にとって導きの

糸として役立つ一般的な結論は、簡単につきのよう
に公式化することができる。

- 1) 人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意思から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。
- 2) 社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階にたつると、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。この時社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。このような諸変革を考察するさいには、経済的な生産諸条件におこった物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態とをつねに区別しなければならない。ある個人を判断するのに、彼が自分自身をどう考えているかと
- いうことにはたよれないのと同様、このような変革の時期を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろ、この意識を、物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならないのである。一つの社会構成は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することは決してなく、また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとってかわることは決してない。だから人間が立ちむかうのはいつも自分が解決できる課題だけである、というのは、もしさらにくわしく考察するならば、課題そのものは、その解決の物質的諸条件がすでに現存しているか、またはすくなくともそれができはじめているばあいにかぎって発生するものだ、ということがつねにわかるであろうから。
- 3) 大ざっぱにいうと、経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的の生産様式をあげることができる。ブルジョア的の生産諸関係は、社会的生産過程の敵対的な、といっても個人的な敵対の意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味での敵対的な、形態の最後のものである。しかし、ブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対関係の解決のための物質的諸条件をもつくりだす。だからこの社会構成をもって、人間社会の前史はおわりをつけるのである。

それでは、1)・2)・3)のそれぞれについて、以下簡単にその内容を説明しよう。

まず1)について。われわれが生活する日常世界は、日々の生活物資を生産したり様々な流通・金融活動等、いわゆる経済活動に従事したりする一方、行財政や軍事・外交などの政治活動、あるいは学問・研究をはじめ文芸・芸術・エンターテインメント等、多様な文化・精神活動を展開している。

これら多様な人間活動の関係を、マルクスは、人間は何よりも生きていくための物質的生活諸条件を生産していかねばならぬという大前提に立脚して、物質的生産諸力に対応した生産関係の総体こそ社会の土台＝経済として措定し、政治的・精神的諸活動はその土台に規定される上部構造と捉えて社会の全体像を説明したのである。

こうした見方は、あらゆる分野に専門分化した学問を研究する学究にとっては、まさに自己の狭い専門性と限られた視野を脱して一挙に世界の全体構造を提示されたこと、しかも産業革命以降爆発的な生産力の増大、交通・通信の進展、機械生産と化学製品の広範な開発と普及が近代生活に不可欠な要素となっている現実を目の当たりにして、政治も文化も戦争さえこうした経済の大きな影響下にあるとするマルクスの土台—上部構造論は、抗しがたい説得力を持って受け容れられていったといつてよい。

次に2)の段落では、一つの社会構成が次の社会構成にいかにして移行していくのかを、生産諸力の発展と生産関係の矛盾として解説している。人類の歴史の進展は、例えば王や武将や英雄たちによる傑出した政治力によってもたらされるように見えるが、その奥底には生産諸力の発展段階と生産関係との矛盾が進展しているのであり、その

下部構造における変化が社会変化の原動力となるという考えである。しかも、ここでは生産関係の内容について説明はしていないが、社会的分業や工場や作業場内での協業や分業関係といった諸関係とともにマルクスが最も重視しているのは生産手段の所有関係から生じる階級関係である。ここで剰余価値学説と唯物史観とは対応している。

そして階級関係を主軸とする旧来の生産関係や所有諸関係が、生産力の発展にとって桎梏に変じた時に社会革命の時期がはじまる、とされるが、その社会革命とは、階級関係の変革をめぐる闘争、即ち階級闘争を基軸としたものと理解することが出来よう。マルクスは、『共産党宣言』発表以来、すべての歴史は階級闘争の歴史であると捉えており、唯物史観の定式化の中でそれは貫かれ生きていたのである。ただし、「一つの社会構成は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することはけっしてなく、また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸関係が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとってかわることはけっしてない。」と明記して、あくまで社会構成の段階的変化における下部構造の発展度合の規定性を重視している。

3)の段落では、人類史において経済的社会構成体の進歩していく段階として、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産様式をあげ、ここで敵対的社會關係の歴史は終わり、その後到達する社会主義—共産主義の社会構成において敵対關係が解消された人類史の新たな段階が始まるとされる。

マルクスの唯物史観は、ヘーゲルの世界精神の発展史観を土台にしながらかそれを唯物弁証法的

1) J・ボードリヤールは、大量消費時代における「モノの価値」とは、モノそのものの使用価値や生産に利用された労働の集約度にあるのではなく、商品に付与された記号(コード)にあるとし、商品としての価値は、他の商品の持つコードとの差異によって生まれると分析した(ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』1970年、フランスにて刊行、日本では1979

年に今村仁司、塚原史により翻訳され、紀伊国屋書店より刊行)。近年、心理学も機械論的・客観的・測定的・数量的・行動主義的心理学から、人の行動と心理の物語(ナラティブ)を社会・文化・歴史的脈脈との質的関連から捉えようとする質的心理学へと大きくシフトしてきている。そうした質的研究は、心理学のみならず社会学、経済学、歴史学、言語学など

に転換し、剰余価値学説や階級闘争史観と密接な連関を持ちながら、人類社会の構造とその段階的発展のあり方を定式化し、人類史上最後の敵対的関係であるブルジョア社会を階級闘争によって打倒し、階級支配の無い理想社会へ導くことが人類史の発展法則に叶い、歴史の進歩であると展望したのである。

こうした展望は、19世紀後半以降恐慌によって資本主義経済が矛盾を露呈し、貧しさに喘ぐ労働者がストライキなどの闘争に立ち上がっていく姿を眼前にみた多くの者たちに、まさに未来を切り開いていく解放のための歴史観と捉えられ、社会主義・共産主義運動に共感し、その担い手となる基礎を提供していったのである。彼らは、階級搾取の廃絶に向けた壮大な人類進歩を推し進める側に自らも与し、その歯車を回転させる力になりたいというヒューマニスティックな思いに駆られて、やがて社会主義運動に挺身していったのである。

2 問題点

以上、唯物史観の内容を概説し、未曾有の影響力を持ちえた理由の一端を考察してきた。だが、この唯物史観は多大な問題をはらんでいる。次にそれを、1)・2)・3)の内容に即して検討していこう。

(1) 下部構造の上部構造規定論について

マルクス経済学の基礎は、『資本論』冒頭で展開されている価値論であるが、実はこの初発からすでに唯物史観の根本的問題点が横たわっていることは、案外気づかれていない。

まず価値論の前提をなす商品の交換という行為そのものに遡って、この問題を考えてみよう。人はそもそも商品を購入する時、価格だけでなく、その品の使用価値やそれに含まれる便利さや効用、

形、持ちやすさ、色彩、デザイン、自然環境や風土、さらに製造企業のブランド性や社会的価値、階層や宗教上の象徴性、などといった心理や精神、文化に直接かかわる部分¹⁾を勘案し、支払う金額との兼ね合いを考慮しながら買うという行為を選択する。近年の行動経済学では、そうした行為は、従来の経済学が前提とした自己の利益の最大化を図ろうとする「経済人」としての合理的な行動というより、慣習や経験則や先入観等の社会心理によってバイアスがかけられた一見非合理に見える判断に基づく行動であることが示されている²⁾。

だがマルクスは、労働価値説にもとづく価値論を打ち立てる際に商品の特性のうちこうした使用価値に関しては、「使用価値であるということは、商品にとって不可欠な前提だと思われるが、商品であるということは、使用価値にとってはどうでもよい規定であるように思われる。経済的形態規定に関してこのように無関係なばあいの使用価値、つまり使用価値としての使用価値は、経済学の考察範囲外にある」³⁾としている。こうして使用価値を考察外として切り捨てた上で、もっぱら「価値」(価格)の側面を分析し、そこから交換された商品に共通して含まれる要素として抽象的・人間労働を剔出して労働価値説の根幹を構築している。

しかし、今見たように、「買う」という最もプリミティブな経済行為も、上部構造に属する心理的・精神的・文化的要素が重要な機能を果たしているのである。このことはすでに佐野學が指摘したとおり、マルクスはその唯物論、唯物史観によって「肉體労働以外の労働の価値創造性は無視せられるか若しくは肉體労働に全く附属せしめられる。而もまた肉體労働においてもその質的差異を認めない。価値を形成する労働は一切の具體性の除

社会科学全般の方法的パラダイム転換をもたらしている。こうした論点について、やまだようこ編『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社、2007年を参照されたい。

2) たとえばリチャード・セイラー+キャス・サンステイーン『実践行動経済学』(遠藤真美訳)日経BP社、2009年、マッテオ

モッテリニ『経済は感情で動く』(泉典子訳)紀伊國屋書店、2008年、ダン・アリエー『予想どおりに不合理』(熊谷淳子訳)早川書房、2013年、等を参照のこと。

3) マルクス『経済学批判』(武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳)岩波文庫版、22頁。

去された抽象的、等一的、無差別的労働であり、ただ時間によって数量的に量せられるにすぎぬ⁴⁾さらに続けて「商品それ自身の産出も、生産方法の発明や改善、又、組織的な労働等の如き精神的なもの、更に進んで、國の文化の向上の種類や速度、勤勞大衆の一般的教養の水準の如き精神的な問題等を缺いては存しえない⁵⁾と。即ち、心的要素という上部構造が主動因となって、「買う」という経済行為の初発が行われているわけである。

そもそも商品であれ、「もの」であれ、人間にとってはこうした様々な精神的要素との関係なしで存在しているわけではない。われわれにとって「もの」は、自己の心的要素との相互交流のなかで存在している。すべて「もの」は、色・重さ・臭い・質感、さらに周囲の自然や環境のなかで醸し出す雰囲気や印象等を備えて人間の感性や心理との関連において存在している。古来から日本人は、太陽・山・海・水・火・木などの自然物、稲・蚕・家・竈・酒・櫛等の製造物にさえ神が宿るとして敬ってきた。それら自然への感謝と怖れ、製造物とそれを伝えてきた祖先への感謝を抱き、「寄物陳思」というようにそうした自然やものとの触れ合いのなかから情緒が生まれ、和歌や俳句が作られ、物語がつむがれてきた。

したがって、「もの」という言葉は、「もののあはれ」「ものおもい」「ものがたり」等々⁶⁾、きわめて心的・精神的要素と分かちがたく結びついて用いられてきた。このように日本では、「もの」から心的精神的感覺的要素を取り除いて単に「物質」として捉えていたならば、文化そのものが形成され得なかったといつてよい。

また現代においてもこうした日本人がものや自然との間で長年培ってきた情の力・直観力・ひらめき・共感力・信用等は、合理性・効率性・論理的思考以上に「和」による組織運営や人間関係、国際関係をして創造性を産みだすものとして評価されている⁷⁾。

しかしながら唯物史観においては、物質的生産諸力とか物質的生活という、心的・精神的要素をあらかじめ捨象した概念を提示した上で、その物質である土台が、捨象したはずの心理や精神といった上部構造を規定していると主張するのである。このような分析手法は、科学分析における一種のトリックと言わざるを得ないであろう。

ところが日本においては、マルクス主義者による日本資本主義分析が本格化した大正中期（1920年代）以降、すでにこうした心理的・精神的要素を組み込んだ工芸品の評価を行っていた人物がいる。柳宗悦である。柳は、民衆が造る工芸品のなかに、使う者への配慮と巧みな工人の手業から生み出された、丈夫で使いやすく飽きない模様と形状・質感を備え、素朴で味わい深い健康な「用の美」を見出し、全国各地の民衆的工芸品を発掘し評価し、その存続と発展に尽力した。柳は、そうした民衆的工芸品の美しさを捉える際に、唯物的でも唯心的でもなく「物心一如」の眼で見るとすべきことを説いているが、その含意を次のように説明している。

「今まで物を讃えると、唯物主義と誇られたり、物を仰ぐと偶像だと貶せられたりしたが、しかしそれは唯心主義の行き過ぎで、「心」と「物」とをそんなに裂いて考えるのはおかしい。心は物の

4) 前掲、佐野學『唯物史観批判』135頁。

5) 同前、佐野學『唯物史観批判』138頁。

6) 例えば、長谷川三千子は、近代小説の名作、谷崎潤一郎の『細雪』のなかに現れる、ものと人間の関わりについて、それが西洋的な自己と分離された物体との関係ではなく、ものを包む空間に醸し出される「心地」や、ものから漂い出す印象や、ものに生々しい命が通って感じられる律動感というような、も

のと人間の心とが周囲の雰囲気や空気を介して繋がっているさまにこそ日本的な通常の現実があると評価している（長谷川三千子「やまごころと『細雪』」『からごころ—日本精神の逆説—』中央公論社、1986年、所収）。

7) 日下公人『「情の力」で勝つ日本』PHP新書、2018年。

8) 柳宗悦『蒐集の弁』1954年、『柳宗悦全集』第十六卷、筑摩書房、662頁。この点に関しては、拙稿「柳宗悦における「物」

裏付けがあつてますます確かな心となり、物も心の裏付けがあつて、いよいよ物たるのであつて、これを厳しく二つに分けて考えるのは自然だとはいへぬ。物のなかにも心を見ぬのは、物を見る眼の衰えを語るに過ぎない。唯物主義に陥ると、とかくそうなる。同じように心のみ認めて、物をさげすむのは心の見方への病に由ろう。」⁸⁾

こうした観点からの民芸の美や品質の特質などは、当時日本資本主義論争に明け暮れていたマルクス主義者には無縁で、全国各地に残る手仕事の民芸品などは、前近代的な生産様式の遅れた分野としてほとんど注目さえされなかったといつてよい。

さらに近年のいわゆる消費経済学を参照するまでもなく、すでに明治大正期の近代化過程における庶民の消費構造や流行の変化を心的・文化的要素に着目して観察していた者がいる。民俗学者の柳田國男である。柳田は『明治大正史 世相編』等において日本人の衣食住全般の変遷の要因について考察しているが、そのなかで注目すべき点をいくつか挙げてみよう。

一つは、明治になってからの「禁色」の解禁に見るように、身分に応じて使用する色が禁じられていた前時代の制度からの解放と、「晴の日」の慣習や宗教的霊的感覚の弛緩によって、人工の染色も含めて多様な色を自由に使用しようという心理的变化が生じたこと⁹⁾。

二つには、前時代までの聖と俗、すなわち「晴」と「褻」における衣食住の厳密な区別が明治以降の階層・移動・職業等の自由化の波のなかで崩れて

いったこと。また近代の新時代に対応した新たな「晴」の日が生まれ、商品への需要を喚起していったこと。すなわち、従来の規則や慣習のなかで晴の日に着る晴着やその日に許されていた飲酒の慣習が、明治以降弛緩して日常＝「褻」の日においてもそれらが浸透していった。また職業や移動の自由にもなつて見知らぬ余所者と団体や組織で共同活動を行つていくための意思疎通のため宴会といった新たな「晴の日」が創出されて新しい需要が増大していったのである¹⁰⁾。

三つには、上記の状態変化と並行して上層階層の慣習が、より下層へと下降していったことである。最上層の衣食住のスタイルが、社会構造の変化や階層間の流動化によって徐々に下層階級に下降して広まっていったのである¹¹⁾。

このような制度的あるいは文化・慣習的な精神に属する要素が、社会の消費に大きく影響を与えていたのであり、同時代のマルクス主義者はこの点への着目もほとんどなかったといえよう。

次にマルクスのいう下部構造である物質的生産について見てみよう。

手仕事の作業場においても機械による工場生産においても、作り手は、常に市場において購入者の関心や意向を考慮して、製品の使い心地・色彩・デザイン・効能・ブランド性等を意識して製品の製造に当たる。そうした心的要素はさらに、男女によつても、年齢や世代によつても、地域や国によつても、宗教の違いによつても、異なる場合もある。生産活動は、こうした複雑な心的・文化的要素と不可分の関係を有しながら行われるのである。ここでも「物質的生産」などというものは本来存在

と「心」『彦根論叢』第302号、1996年7月、を参照。柳は、そうした「物心一如」の見方から、先入観を排し「もの」と直接「直観」によって対峙せよと説く。この認識論は、西田幾多郎の認識論に依っている。

9) 柳田國男『明治大正史 第四卷 世相編』朝日新聞社、1931年、引用は講談社学術文庫版、1993年、23頁～44頁。

10) 同前書「第七章 酒」227～248頁。

11) 柳田國男は、近世～近代の園芸の普及について「わずかな世紀の間に日本の園芸は美しいものとなった。そうして一方上流の流行の下火は、いつとなくその外側の、庶民の層へ移つていったのであった。」同前書、31頁とし、また木綿の普及についても「今日の女の常着は以前の晴れ着であった。すなわち、上臈のよそ行ききんぎょの衣の型であった」同、47頁、と述べている。

しないのである。消費者のニーズや消費傾向、流行などと無関係にただやみくもに商品を生産しても在庫の山を築くだけである。

生産活動の主体である労働についても、マルクスは、商品の価値として「抽象的人間労働」を抽出したが、そこで切り捨てられた使用価値的質的側面、すなわち具体的有用労働に関してはほとんど興味を示していない。数限りない多様な商品の生産にはそれを作りだす多様な労働が対応する。各地域特有の原材料を用い、家族の手仕事か、職人技か、あるいは機械を用いた労働か、作るものも各種の織物か、家具か、酒か、味噌か、自動車か、等々、そこには人間が知覚・触覚・聴覚・味覚・臭覚の五感を総動員し、長年培ってきた知識と知恵と熟練の技を用いて、ものに魂を注ぎ込みながら加工、製造してきた「ものづくりの文化」が凝縮されている。ここにこそ人間が自然の性質を会得し、加工し、使い手のことを慮って「物心一如」の関係のなかで製品を紡ぎだしてきた労働の喜びがあるのではないか。

しかし、マルクスのいう「抽象的人間労働」概念からはまったくこうした労働文化の質的中身は見えてこない。「労働者の解放」を掲げながら、実は労働そのものに対して実に無味乾燥な物質的側面しか見ておらず、人間存在の複雑で豊かな実相を見ていないのである。

まして、顧客が商品を購入した後、生活のなかでそれを消費する過程は、長らく経済学の分析対象から度外視されてきた。消費の過程こそ、日常生活そのものであり人間の心的要素と大きくかわる部分である。購入時に予想された使い心地やデ

ザイン性、機能性、ブランドの効力等が消費の過程で実際に購入者に味わわれて、その真価が実感されるのである。そこで満足が得られれば、製造者への信用が醸成され再度購入したいという欲求に繋がるし、得られなければ差し控えられることになり、作り手の企業の生産活動に直接影響する。このように、下部構造と言われる経済活動そのものが上部構造として分けられた心的・精神的要素と絡み合いながら、むしろそれらに先導されながら進展していくのである。

そもそも現実社会の中で、上部構造である精神や政治の在り方が決定的に経済に影響を与えた事例は、枚挙にいとまがないほどである。マックスウェーバーの指摘したプロテスタンティズムが資本主義形成に果たした役割を挙げるまでもなく存在する。このことをマルクス自身が認めている箇所がある。マルクスは、その剰余価値学説の要である労働力商品に関して、労働力を賄うための生活手段としての食糧、衣服、暖房、住居などの自然的必要は、一国の自然的な特殊性によって異なるのと同時に、歴史的な文明の到達度に依存し、賃労働者階級が形成されてきた歴史的起源がその習慣や要求に影響を与え続けており、「したがって、労働力は価値の観点から見れば、精神的、歴史的な要素を内包しており、このことが労働力を他の商品から区別しているのである」¹²⁾と明確に述べている。要するに、マルクス主義の根幹である剰余価値論の前提をなす労働力の形成そのものが、精神的、歴史的な要素を含んでいて、それに規定されていることを認めているのであり、これは唯物史観とは真逆の論理である。

12) マルクス『資本論』（フランス語版）158-159頁。向坂逸郎訳では、この部分は「したがって、他の商品とは反対に、労働力の価値規定は、一つの歴史的な、そして道徳的な要素を含んでいる」となっている。岩波文庫『資本論』（一）298頁。

13) 前掲『共産主義黒書<ソ連編>』ではそうした状況を次のように述べている。すなわち「レーニンとその同志は、「階級闘争」の立場を明確にし、政治的・イデオロギ的敵、あるいは服従しない住民さえも敵と見なして扱い、容赦なく皆殺しに

すべきだとした。ポリシェビキは自分たちの独裁政権に反対する者、抵抗する者を、たとえ彼らが受動的であっても、法律的にも肉体的にも抹殺することに決めた。それは彼らが政治的に対立する集団である時だけでなく、貴族、ブルジョア、インテリゲンツィア、教会、専門的職業（将校、憲兵等々）などの社会集団であっても同様で、しばしば彼ら全員を虐殺したのだった。1920年からは、「コサック解体[ラスカザーチヴァニエ]」がジェノサイドの定義に広く当てはめられるようになった。コサックの住民全体が、厳しく定められた地域に移され

歴史的に見ても、封建制下の諸制度や法制が、人々を身分制下に緊縛し職業選択の自由を奪い、自由な農作物の栽培や自由な経済活動を制限する。資本主義体制下においても、時々の経済政策がいかに経済の実態をドラスティックに変容させるか、公共需要創出のケインズ政策、戦時統制経済政策、昨今のアベノミクス、消費増税の影響等を見れば得心が得られよう。

そして最も上部構造の政治体制や政策が直接的に実体経済に著しい影響を及ぼすものこそ、ほかならぬ社会主義体制下での計画経済であるというパラドクスをマルクス主義者はどれほど自覚しているのだろうか。だが、計画経済を実施するためには国民の消費の動向を把握しなくてはならない。個々の国民の消費の嗜好、流行、ニーズの中身等々、をどうやって把握するのか。様々なデータ調査を駆使して、それらはようやく概観が把握できるかもしれない。しかし、マルクス主義者は、そうした人間の上部構造に関する心的・精神的・文化的側面に関して著しく関心が薄い。しかも唯物史観のもとでは上部構造の下部構造への影響力の甚大さを自覚的に認識できていない。

そうすると、国民の生活に直結する消費の動向を正確に把握しえないまま、科学的需要調査も議会や種々の委員会等を通した国民の意向をくみ取ることも行わず、共産党幹部の政治的思惑に従って、安易に様々な経済政策が計画経済の名のもとに強権的に断行される危険性が極めて高くなる。国民の多様な消費動向や生活水準、生産能力と乖離した極端な工業化や農業生産増強政策が強行され、反対者はことごとく弾圧され、その結

果国民経済が大打撃を受け、経済や生活そのものを破壊して多数の餓死者さえ生み出してしまうという悲劇が現出した¹³⁾。こうして下部構造の上部構造への規定性を強調する者が、労働者独裁権力という最強の上部構造を用いて下部構造に決定的影響を与え、史上空前の規模で民衆に惨禍を与え続けていくという悲劇が生み出されたのである。

さて、下部構造の上部構造規程論は、剰余価値学説による搾取論と結びついて、マルクス主義の国家論にも特異な性質を付与している。エンゲルスは、『家族、私有財産及国家の起源』および『反デューリング論』のなかで国家の発生と本質について次のように明言している。

- 1) 「国家はけっして外部から社会におしつけられた権力ではない。・・・それは、むしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決しえない矛盾にまきこまれ、自分ではらいのける力のない、和解しえない諸対立に分裂したことの告白である。ところで、これらの諸対立が、すなわち相対抗する経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼさないためには、外見上社会のうえに立ってこの衝突を緩和し、それを「秩序」のわくのなかにたもつべき権力が必要となった。そして、社会からうまれながら社会のうえに立ち、社会にたいしますます外的なものとなってゆくこの権力が、国家である。

たあと、男は銃殺され、女、子供、老人は強制的に移住させられて、村は徹底的に破壊されるか、あるいは新しい非コサック系住民の住むところとなった。・・・1930～1932年の「クラーク(自営農民…引用者)撲滅」は、この「コサック解体」を大規模に再現したものにすぎなかった。・・・集団化に反対したクラークは銃殺されたり、妻子や年寄りと一緒に強制的に移住させられたりした。・・・強制的な集団化に反対した農村住民の抵抗に関係のある1932～1933年のウクライナの大飢饉についていえば、数ヶ月間に600万の死者を出した。」(16～17頁)。

中華人民共和国では、毛沢東の専制的指導体制の下、急激で大規模な農工業の生産拡大を目標に1957年から「大躍進政策」が打ち出されたが、実態を無視したノルマ強制、誤った技術指導(超過密密植・深耕、風土に適さない作物選択、誤った耕地の改廃、前近代的製鉄法、等々)、過度な共同化、虚偽の生産申告、呵責な反対者弾圧等が重なって生産は停滞し、大規模な飢饉を誘発して、1959～61年に2,000万～4,300万人が餓死した(前掲『共産主義黒書<コミンテルン・アジア編>』141～152頁)。

古い氏族組織に比較しての国家の特徴は、第一に、地域による国民の区分である。……領域の区分を出発点にとり、市民には、氏族や種族にかかわりなくその定着した場所で彼らの公的な権利義務をはたさせるようにした。この所属場所による国民の組織は、あらゆる国家に共通のものである。……第二は、みずから武装力として組織する住民とはもはや直接には一致しない、一つの公的強力の設定である。……アテナイ民主制の人民軍隊は、奴隷にたいする貴族的な公的強力であり、彼らを抑圧していたのである。しかし、市民を抑圧しておくためにも、前述のように憲兵が必要であった。この公的強力はどの国家にも存在する。それは、たんに武装した人間からなりたっているばかりでなく、さらに、……監獄やあらゆる種類の強制施設から、なりたっている。……この公的権力を維持するためには、国家の公民の献金が必要である、——すなわち租税である。……いまでは官吏は、公的強力と徴税権とをにぎって、社会の機関でありながら社会のうゑに立っている。」(『家族・私有財産及国家の起源』)¹⁴⁾

2) 「国家は階級対立を抑制しておく必要から生じたものであるから、しかし同時にこれらの階級の衝突のただなかに生じたものであるから、それは、もっとも勢力のある、経済的に支配する階級の国家であるのが普通である。この階級は国家をもちいて政治的にも支配する階級となり、このようにして、被抑圧階級を抑圧し搾取するための新しい手段を獲得する。こうして、古代国家は、なによりもまず奴隷を抑圧するための奴隷所有者の国家であった

し、それと同じに封建国家は、農奴と隷農を抑圧するための貴族の機関であった。そして、近代の代議制国家は、資本が賃労働を搾取するための道具である。」(『家族・私有財産及国家の起源』)¹⁵⁾

3) 「株式会社への転化も、国家的所有への転化も、生産力のもつ資本という性質を廃止するものではない。株式会社の場合には、このことは手にとるように明白である。また、近代国家は、これまた資本主義的生産様式の一般的な外的諸条件を、労働者や、さらに個々の資本家の侵害から守って維持するために、ブルジョア社会が自分のためにつくりだす組織にすぎない。近代国家は、どういう形態をとっているにせよ、本質上は資本家の機関であり、資本家の国家であり、観念上の総資本家である。国家がますます多くの生産力を引きついで自分の所有に移せば移すほど、それはますます現実の総資本家となり、ますます多くの国民を搾取するようになる。」(『反デューリング論』)¹⁶⁾

4) 「社会の諸階級への分裂を必然的にとまらう経済的發展の一定の段階において、この分裂によって国家が一つの必要事となったのである。いまわれわれは、これらの階級の存在が必然的なものでなくなっただけか、かえって断然生産の障害となりつつあるような、そういう生産の發展段階に急歩調で近づいている。階級は、以前にその成立が不可避であったように、同じく不可避的に消滅するだろう。階級の消滅とともに、国家も不可避的に消滅するだろう。生産者の自由で平等な協同関係を基礎にして生産を組織しかえる社会は、国

14) エンゲルス『家族、私有財産及国家』村井康男・村田陽一訳、国民文庫版、221～222頁。

15) 同前書、223頁。

16) エンゲルス『反デューリング論』2村井康男・村田陽一訳、国民文庫版、499頁。

家機関の全体を、そのときそれが当然におか
るべき場所へ移すであろう——すなわち、糸
車や青銅の斧とならべて、古代博物館へ。」
（『家族・私有財産及国家の起源』）¹⁷⁾

上記引用に見ると、エンゲルスは古代国家発生
における国家を、2)の部分では階級対立を抑圧し
ておく必要から生じたもので、経済的にも政治的
にも支配する階級が被支配階級を抑圧し搾取す
るための手段として捉えている。それは、下部構造
における経済的社会構成において生産手段の所
有者が直接的生産者を搾取して剰余価値を得る
とする剰余価値学説にもとづいて、上部構造たる
国家の本質をとらえたものといえよう。

ここで注意すべき点は、1)の部分において国家
の成立が「相対抗する経済的利害をもつ諸階級
が、無益な闘争のうちに自分自身と社会をほろぼ
さないためには、外見上社会のうえに立ってこの衝
突を緩和し、それを「秩序」のわくのなかにたもつ
べき権力が必要となった。」と述べられているよう
に、支配階級による被支配階級の抑圧のみが国
家の本質とは言えないことが明記されていること
である。

アテナイにおける国家の形成についても、自由
人と奴隷との差違とならんで富者と貧者の差違が
現れ、高利貸と債務者との分裂といった市民内部
の非和解的な階級分裂とその公的組織による緩和
の必要性こそ国家の機能として重視している。

またこうして誕生した国家の特徴として、地域に
よって国民を区分して公的な権利義務をはたさせ、
そのための税収を司る官吏の存在を指摘している。
つまり、被搾取階級としての奴隷だけでなく、貴族

や市民も含んだ国民全体の公共機能を果たすこ
ともにも国家の本質を見ているのである。

こうした国家の公共機能をエンゲルス国家論の
重要部分として光を当てたのは熊野聰である。だ
が氏はさらに国家が公共機能をも果たすというこ
とを、国家の階級抑圧機関としての機能と別個に
捉える国家の「二重機能」論を併せて批判してい
る。すなわち、階級社会ではすべての社会的なこ
とが階級的なこととしてあらわれるのであり、公共
の機能もそれがはたされるためには階級的性格を
とらざるをえず、たとえば近代国家のばあいには、
全社会を代表したと称し、実際にも代表する形式
を整えた国家が、公共の名において、この国家に
代表される国民の一部すなわちある階級にたいす
る抑圧をこととしている、と理解すべきであるとし
ている。そしてレーニンは、エンゲルスの『家族、私
有財産及国家の起源』を誤読し、国家の階級抑
圧機関としての機能のみをその本質として捉えて
『国家と革命』を展開していると批判される¹⁸⁾。

レーニンは、『国家と革命』のなかで「被抑圧階
級を搾取する道具としての国家」として階級抑圧
機関論を展開し、これがマルクス・レーニン主義
の国家論として強い影響力を有してきた。さらに
レーニンは、エンゲルスの説いた「国家の死滅」論
に関しても、それが資本主義国家の死滅ではなく、
あくまで階級対立が消滅したあとの社会主義国家
についての指摘であることに注意を促すとともに、
資本主義国家を倒す社会主義革命における「プロ
レタリアートの独裁」による「暴力革命」の意義を
繰り返し強調している。

レーニンは、1870年代のドイツ社会民主主義
者がその綱領的要求として掲げ、エンゲルスも一
時是認した「自由な人民国家」というスローガンも、

17) 同前『家族、私有財産及国家の起源』226頁。

18) 熊野聰「エンゲルス国家論の再検討」Ⅱ『共同体と国
家の歴史理論』青木書店、4～55頁、1976年。

「ブルジョア民主主義の粉飾を表現していただけでなく、一般にあらゆる国家にたいする社会主義的批判の無理解をも表現していた」とし、続けて「われわれは、資本主義のもとでのプロレタリアートにとっての最良の国家形態として、民主共和制に賛成であるが、しかし、もっとも民主的なブルジョア共和制においても、賃金奴隷制が人民の運命であることを忘れる権利はわれわれにはない。さらに、あらゆる国家は被抑圧階級を「抑圧するための特殊権力」である。だからあらゆる国家は非自由で非人民的な国家である。」¹⁹⁾として、レーニン国家論の核心を述べている。こうしたブルジョア国家の本質を確認した上で「ブルジョア国家がプロレタリア国家（プロレタリアートの独裁）と死滅の道を通じて交替することは不可能であり、それは、通常、暴力革命によってのみ可能である。」²⁰⁾と強調している。

そして「ブルジョアジーの打倒は、ブルジョアジーの不可避的で絶望的な反抗を抑圧して、新しい経済制度のためにすべての勤労被搾取大衆を組織する能力をもつ支配階級に、プロレタリアートが転化することによってはじめて実現されうる。プロレタリアートには、国家権力、すなわち、中央集権的な権力組織、暴力組織が必要であるが、それは搾取者の反抗を抑圧するためにも、社会主義経済を「組織」する事業において膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアートを指導するためにも必要なのである。」と明言している²¹⁾。

前述したように剰余価値は、資本主義社会の工場制のもとにあっても労働者だけでなく、工場の統括と経営を担う経営者・資本家も加わって初めて生み出される。それは、奴隷制における奴隷農

場の統括者・経営者、封建制下における領地や農地の管理・経営者たる領主や地主においても同様のことがいいうる。

たしかに経済的、政治的に優勢な階級は、自己の権力を維持するために国家の様々な機関を活用することが常道かもしれない。しかし、彼等は組織や社会の指導層として、同時に、様々な階層や地域の諸利害を調整し、さらにはインフラや社会資本の整備・国土（領土）防衛のための組織維持、教育・衛生なども含んだ公的事業のための資金徴収（徴税）と支出管理のための行財政運営を行って、社会全般の公的利益を促進してきたのである。これらの運行のための、諸階級の利害調整機関として近代市民社会では、議会と官僚機構がその役割を飛躍的に増大させていく。そこで様々な階級の利害が反映され、彼等との妥協と協力体制が整えられていったのである。

すなわち社会はマルクス・エンゲルスのような支配階級が被支配階級の剰余価値を一方的に搾取する階級社会にのみ還元できるものではなく、いわゆる支配層も剰余価値創出に指導的役割を果たし、また直接的経済支配に与しない小生産者や商人、雑業層など多様な階層が各々の社会的役割を担って存在している。したがって、国家はそうした諸階級の利害を調整し、共通利害である公共の事業を遂行することを任務とする。その中には、そうした事業を通して経済的・政治的に優勢な階級が自己の利益を追求する場合もあるだろう。しかし、それがすべてではない。

エンゲルスの国家論のなかに公共的な機能をもとめた熊野の論も、マルクス・エンゲルスの階級社会論に立脚しているために、階級社会ではすべての社会的なことが階級的なこととしてあらわれ、

19) 上記の引用とも、レーニン『国家と革命』（宇高基輔訳）岩波文庫、33-34頁。

20) 同上書、36頁。

21) 同上書、42頁。

近代国家では、全社会を代表したと称し、実際にも代表する形式を整えた国家が、公共の名において、この国家に代表される国民の一部すなわちある階級にたいする抑圧をこととして、とされ、階級国家論のなかに収斂されてしまっている。だが社会は階級搾取ですべてが覆われているわけではなく、様々な階層、地域のレベルで公的な事業が存在し、国家がそれらの統括と調整に係わっているのである。

エンゲルスは、たしかに国家形成の段階においては、国家の公共機能について触れているが、上記引用3)に見るように資本主義が株式会社や国家的所有の形態を増してゆく段階においては、国家は「ますます現実の総資本家となり、ますます多くの国民を搾取するようになる。」と指摘するのみで、そこに公共機能の拡充やそれを果たす国家の多様な利害調整機能等については言及していない。したがって、社会主義革命以後に階級搾取や階級対立が消滅すれば、国家はその本来の存在意義を失って消滅していくと説いたのである(4)。

だが、近代以降資本主義国家では社会の公共的領域は古代とは比べものにならないくらい拡大して複雑になり、マックスウェーバーが強調したように工場、大学・研究所、軍隊、国家機構において専門分化と官僚制が進展し、それらを司る専門職員と官僚機構が肥大化していく。したがって、社会主義革命において階級搾取が廃止されたとしても、膨大な公共機能は現存するし、社会主義経済体制の建設のためにもそれらを専門に担う国家の官僚機構は残存、拡大していくであろう²²⁾。したがって国家はエンゲルスのいうように階級支配が消滅したとしてもけっして死滅しないのである。

実際に社会主義国家のもとでは、下部構造の経済全般を計画経済によって統制するためさらに膨大な官僚機構＝国家機構が必要となり、しかもブルジョア社会のような議会はかつてのブルジョアジーによる支配機構として否定されるから(レーニンの言質を想起) 諸利害の調整も十分機能せず、計画経済は「労働者階級の独裁体制」のもと専制的・強権的に実施されるために、少数の共産党指導部と官僚による剰余価値の独占と民衆支配が苛烈に行われることになる。この段階でこそ国家は、共産党指導者による民衆支配のための暴力装置という性質を最も露骨に獲得することになるのではないだろうか。レーニンが暴力革命の遂行や「社会主義経済を「組織」する事業において膨大な住民大衆、すなわち農民、小ブルジョアジー、半プロレタリアートを指導するため」に必要とした中央集権的な権力組織や暴力組織、すなわち共産党のための軍隊、警察、諜報機関、情報機関、これ等党と国家の諸機関が、どれだけ専制的な暴力機関となって政敵や諸階級を打ちのめし謀殺したか、計り知れないのである。

さて以上みてきた、下部構造の階級関係が上部構造の性格を規定するという関係把握は国家に限ったことではない。『共産党宣言』では、「思想の歴史の証明するところは、精神的生産は物質的生産とともに作り変えられるということのほかは何があるか?ある時代の支配的思想は、つねに支配階級の思想にすぎないのである」²³⁾と述べ、「法律、道徳、宗教は、プロレタリアにとっては、すべてブルジョアの偏見であって、それらすべての背景にはブルジョアの利益がかくされている」²⁴⁾と断言している。

22) マックス・ウェーバーは、1919年6月にオーストリア将校団を前に社会主義に関する見解を講演で披露し、そのなかで資本主義社会において進むこうした専門官僚制化は、「私の工場の代わりに、国家の大統領や大臣がそれを管理する場合でありまして、根本の事態にはまったく変わらないのであります。」と述べ、さらに経済の国営化や官僚統制、消費

者社会主義(消費者組織の国家統制や国営化)等についても否定的見解を表明している(マックス・ウェーバー『社会主義』(濱島朗訳)講談社学術文庫)。

23) 前掲、『共産党宣言』72-73頁。

24) 同上、58頁。

すなわち、たとえば資本主義社会におけるすべての思想・道徳・宗教なども結局、資本家による民衆支配のための装置とみなされて基本的に否定されるか、搾取を覆い隠したり、一定の合意を取りつけて支配を貫徹したりするための統合手段としてしか認識されない。したがって、ロシア革命後や中華人民共和国の文化大革命において、旧支配層の階級支配に資するものとして宗教施設が破壊され、それまで蓄積されてきた音楽・絵画・映画・演劇・文学そして学問に至るまで、「ブルジョア的」「階級の敵」として迫害され破壊されたものは数知れないのである。

こうしてマルクス主義は、人間が歴史とともに様々な経験と思索と創造によって積み上げてきた思想や文化や精神さえも、「階級支配」という自らが勝手に規定した、一面的で社会に分裂と敵対を醸成する乱暴極まりない規定によって抹殺していったのである。

Characteristics and Problems of Socialist and Communist World Views

a Critical Examination of the Surplus Value Theory and Historical Materialism (2)

Masao Tsutsui

This paper will explain the concept of historical materialism proposed by Karl Marx and critically review its primary theme. According to this theory, society is built on an economic base that consists of production relations between productive forces and each stage in the development of the forces. Social, political and intellectual forms stand on it as a superstructure, and the economic base determines those forms, not the other way around.

There is a major problem in this view. Purchasing a product, for example, is the most basic economic activity. Nevertheless, we consider not only the price or value of a given product but also value in use in a broad sense, such as its use, ease of use, design and brand name when deciding whether to buy it. Moreover, productive activities involve understanding psychological factors such as consumer needs and the latest trends. Regulations and economic policies that a national government formulates exert considerable influence on real economy. This indicates that the superstructure conditions the economy in the substructure.

Furthermore, given that the structure of society in the substructure is regarded as class society that exploits surplus value, it is not fair to view the nature of a state or the superstructure as a violent institution in which the ruling class always suppresses the subordinate class. Society does not have a class system that ex-

ploits surplus value. A state should be considered a governing body that engages in public works for each stratum in society and fulfills public functions by coordinating interests of all strata and maintaining society.

In socialist states, the enormous influence of the superstructure on the substructure is not widely recognized, and little attention is paid to society's diverse psychological and cultural features. Thus, such governments have blindly enforced authoritarian policy and planned economy, causing tremendous suffering to their people.